井月さんの死

何処やらに雀の声聞く霞かな

一八八六（明治一九）年の師走、寒風吹きすさぶ伊那の火山峠の下、田んぼに、身にぼろをまとった一人の老人が倒れていました。たぶん死んでいるだろうと近寄ってみれば、息はありましたがもはや身動きできない。井月さんは知り合いに見守られながら戸板に乗せられて三峰川を渡り、美篶末広

の太田窪の一軒のあばら家にかつぎこまれました。名前ばかりでしたが、井月さんが籍を置いた家の別棟です。

腰も立たず口もきけない体を横たえていた井月さんでしたが、この家の看護を受け、一命はとりとめました。しかし、翌年の一八八七（明治二〇）年三月一〇日（旧暦二月一六日）、六六歳で息を引き取ったのです。

亡くなる二時間前に次の句を書き残しました。

何処やらに雀の声聞く霞かな

井月さんが書いた雀とは鶴のこと、霞のどこやらに鶴の鳴き声が聞こえてくるなあ、というのです。手にした筆はふるえていましたが、霞という字は墨字を薄くぼんやりと書いています。霞のイメージを字に込めたのです。俳句仲間の友人や弟子に見守られての最期でした。

信州の山深い伊那谷にやってきておよそ三〇年間を過ごし、自分の境涯についてほとんど話さなかった人でした。

「俺が死んだら俵へでもつめ込め。寒い時はよす。菜種の花咲く時分だナ」と日頃口にしていた井月さんです。

亡くなったのは、本当に菜の花が咲いている時でした。伊那の地で野たれ死に同然でしたが、その生涯は、俳句の道を求め、旅に生き旅に死にたいと願っていた井月さんの、本望だったのかもしれません。

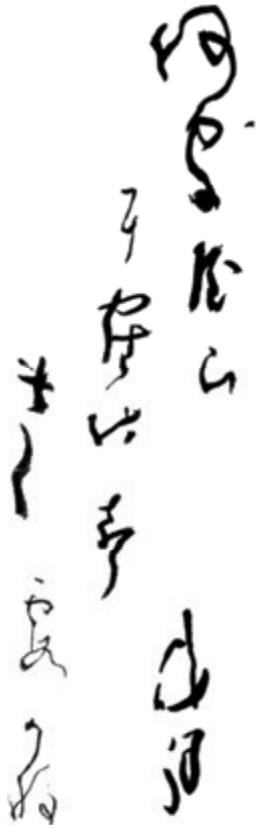
美篶六道原にある墓地の大きな木の根っこに、三峰川から持ってきた丸く少し細長い自然石を置いています。それが井月さんの墓です。

石の面には

降とまで人には見せて花曇

と刻まれていたのですが、今では消えて見えません。

井月さんの亡くなった菜の花の咲く頃には、東に仙丈ヶ岳、西には駒ヶ岳が、雪をかぶったきれいな姿で望まれます。



井月さん最後の句

井月が世に出るまで

井月を慕った人

井月が世に出たのは、高名な小説家芥川龍之介の強い推薦があったからです。主治医をやっていた伊那出身の下島空谷（本名：勲）が、芥川龍之介に井月についての少年時代の記憶を語ったことから出版を強く勧められ、伊那の弟の協力を得て句を集めたものを、一九二一（大正一〇）年に『井月の句集』として世に出したのです。俳句は一〇二八句、その他「略伝」「奇行逸話」「書簡」「連句」も紹介しました。

芥川龍之介は、「このせち辛い近世にも、こういう人物があったということは、我々下根の凡夫の心を勇猛ならしむる力がある」と、本文の後に置く跋文で語っています。つまり心根が低い平凡な私たちの心を勇み立たせてくれるというのです。

その後、伊那高等女学校（現伊那弥生ヶ丘高校）の先生として赴任してきた高津才次郎が、これを改定・増補して下島勲・高津才次郎編『漂泊俳人井月全集』（一九三〇＝昭和五年）を発刊しました。

これを手にした漂泊の俳人種田山頭火は「おゝ井月よ」と感嘆し、亡くなる一年前に井月の墓を訪れました。

『漂泊俳人井月全集』は、井上井月顕彰会によって五版まで増補改定を重ねています。井月は、つげ義春の漫画「蒸発」（『無能の人』収録）にもなって、フランスでも翻訳出版されています。

付録2

井月年表

年齢	西暦	井月に起こった出来事
一歳	一八二二年（文政五）	越後長岡（現新潟県長岡市）に生まれる。本名は勝蔵、克三、勝之進（ただし親兄弟・家柄など未詳）
一八歳	一八三九年（天保一〇）	この頃出郷。井月江戸へ。
二七歳	一八四八年（嘉永元）	信州に初めて足跡（現中野市）、この年頃「泥くさき子供の髪や雲の峰」の句
三一歳	一八五二年（嘉永五）	長野県で、吉村木鵞の母へ追弔句を。「乾く間もなく秋暮れぬ露の袖」
三七歳	一八五八年（安政五）	この頃初めて伊那へ、中沢村高見（現駒ケ根市）
四二歳	一八六三年（文久三）	高遠藩重臣岡村菊叟を訪ね、井月編句集「越後獅子」の序を乞う。
四三歳	一八六四年（元治元）	善光寺宝勝院を訪れる。およそ一〇〇日間の滞在。井月編句集「家づと集」なる。
五一歳	一八七二年（明治五）	柳廼舎（井月のこと）送別書画展観会の開催、参加者一一三名。
六三歳	一八八四年（明治一七）	塩原家（現伊那市美篶末広太田窪）へ入籍。
六四歳	一八八五年（明治一八）	井月編句集「余波の水くき」この頃刊
六五歳	一八八六年（明治一九）	一二月暮れ、伊那村火山峠（現駒ケ根市）で倒れる。
六六歳	一八八七年（明治二〇）	美篶末広太田窪にて死す。三月一〇日（旧暦　二月一六日）

あとがき

◉戦争前の一九三八（昭和一三）年に、現在の伊那市美篶小学校で教鞭をとっていた先生を中心に郷土読物「井月さん」という本が書かれ、副読本として多くの生徒に読まれていました。

◉新たに発刊した小さなこの本は、その後の新しい研究を取り入れて小学校高学年の皆さんに、井月さんの俳句を通して井月さんの生き方を知り、伊那の風土、さらに人々の営みが織り上げた伊那の歴史といったものに目を向けていただこうという目的で作られました。

◉井月さんが、三〇年間自分の家を持たずにあちこちの家を訪ねて一生を終えたということにびっくりしますが、その三〇年間を世話し続けた人たちが伊那にいたということには、さらに驚嘆してしまいます。なぜ井月さんがこの地に来たのかはっきりわかりませんが、やはり伊那の人たちのやさしさ、人情の厚さが、ここを生涯の地として選ばせた大きな理由ではなかったでしょうか。皆で助け合って、共に生きていこうという気持ちが、私たちの伊那の風土にずっと根づいていると思います。井月さんを通して、伊那の風土の良さといったものを、ぜひ学んでください。

◉この絵本は、「長野県地域発元気づくり支援金」を活用して出版されたもので、上伊那教育会を始め多くの皆様方の協力によって生まれました。俳句や俳句の歴史については、伊那谷出身の俳人伊藤伊那男さん、大野田好記さん、矢島 惠さんの協力を得ました。

二〇一六年三月一〇日　井月さんの命日に

伊那市教育委員会
井上井月顕彰会

伊那の井月さん

平成二十八年三月一〇日　初版発行

編　著　伊那市教育委員会
〒三九六-八六一七 長野県伊那市下新田三〇五〇番地
電話：〇二六五-七八-四二二[代表]
一般社団法人 井上井月顕彰会

執　筆　北村皆雄
校　閲　竹入弘元
挿　絵　橋爪まんぷ
デザイン　島田 薫
印刷・製本　玄冬

©2016 Ina City Bord of Education/Inoueseigetsu Memorial Foundation
Printed in Japan
掲載の記事・挿絵等の無断複写・複製・転載・情報システム等への入力を禁じます。